

## 昭和54年度日本気象学会奨励金受領者選定理由書

奨励金受領者 木村 悠<sup>きむら ひさし</sup> (愛媛県教育センター)

研究題目 「瀬戸内海の島の気象観測」による「野外科学」と「野外学習」の教育方法

### 選定理由

木村会員は、高校や教育センターに勤務のかたわら、瀬戸内海の島の気象観測を約20年続けてきた。その学術的成果をまとめるかたわら、同会員はこの多量のデータや体験を活用して、野外観測を導入する野外現場主義の気象教育のあり方を研究し、その試案作りをめざしている。その趣旨は次の通りである。従来の学校気象教育は「室内教育」に偏り過ぎた。その室内教育においては、生の自然を「教材化」という人工的处理(制御・整理)工程を経た、いわば「加工品」ともいうべきデータを教材として教室に持ち込む。ここに、科学教育上の問題と障害を生む。言い換えれば、複雑・混沌の自然事象から、既に「ある程度の秩序」を発見したことに相当する。「問題の発見」が既に終わったといえる。その後は専ら「問題の解法」のみの学習になる。「混沌から秩序を発見する」自然の探求では、まずもって問題をみつけることが最優先課題である。その目的のための「野外教育」の学習方法を具体的に研究しようとしている。同会員は、既に多くの実績のある研究者・教育者であって、必ずしも新人の奨励には当たらないが、地方にあって意欲的に気象教育を生きたものにすべく努めており、その方法論の掘り下げも深いので、今後大きい成果が期待されるものと認め、本学会はここに同会員に奨励金を贈るものである。

奨励金受領者 坂上公平<sup>さかみ こうへい</sup> (輪島測候所)

研究題目 輪島に大雪をもたらす cold vortex に伴う  
じょう乱について

### 選定理由

坂上会員は、従来、主として上層の cold vortex についての研究を行ってきた。今回は cold vortex に伴う小低気圧によって、輪島地方で寒候期にもたらされる里雪型の大雪を対象とした研究計画をたてた。この現象は、寒候期において3~4回みられるが、冬季の交通機関

や一般の生活などに与える影響は大きいので、これらの現象のケース・スタディを考えている。解析資料としては、福井レーダ、新潟レーダの解析と共に、GMS 資料、TIROS-N 資料を用い、ゾンデ資料とあわせて、現象の構造を時間・空間的に検討することになっている。同会員のこの研究テーマは、昭和50、52年度受領者と同じ分野に属するものであるが、北陸地方の寒候期を対象としており、北陸地方の暖候期を対象とした昭和47年度受領者の研究と対をなすものである。同会員の今回の研究テーマには、まだ多くの未解決の問題点が残されており、衛星資料を用いた仕事が今後おおいに行なわれるべきものとする。本学会は、このような同会員の研究が、局地気象の研究に大きな意義をもつことを認め、その研究の推進を支援するために、ここに奨励金を贈るものである。

奨励金受領者 小柴 厚<sup>こしば かつし</sup> (福岡管区気象台)

研究題目 九州地方の夏季の対流系について

### 選定理由

小柴会員は、これまで全国規模での解析が主であった、日射によって誘発される対流現象について、地方予報中核担当区程度の領域を対象とした、もう一段ぎめの細かい気流系を取り上げ、それを総合的に調査研究しようとしている。具体的には、九州全体を対象としてアメダスの毎時データ、10分データを利用してケース・スタディによって流線場と温度場を解析し、その変化と日変化の様式、顕著な現象(たとえば、海陸風前線の発生・発達機構、雷雨などの発生機構)の理解をはかる。また、レーダ・エコーなどとの対応をみるため、流跡線場の解析、高層データなどの解析も計画している。本研究の最終的な目的は、九州地方規模でのモデルを作り、他の計算結果なども援用しつつ、夏季の九州全体での流線場と温度場の構造を明らかにすることである。同会員のこの研究計画は、非常に地域に密着したもので、今後の気象技術の発展にとって重要度が大きいことを認め、本学会はその研究の推進を支援するために、ここに奨励金を贈るものである。